

話しことばを重視した「国語表現」の一年間の授業

寺井 一

【抄録】 筆者が平成12年度に行った「国語表現」の授業内容を記し、授業の進め方について分析をする。今回の「国語表現」において筆者が配慮したのは、話しことばに重点を置くこと、基本から順を追って指導すること、話しことばと書きことばを絡めて指導すること、および、他教科・他科目との乗り入れを図ったことである。「話すこと・聞くこと」を中心としたこれからの「国語表現」の教育を考えに入れながら、今回の実践について論ずる。

【キーワード】 音声 音声の基礎 対話と会話 声を出すこと 話しことば教育の目標

1. はじめに

本校の高校三年生に必修として課していた「国語表現」(2単位)について平成12年度に筆者が行った授業活動をもとに、国語科教育の中での、話しことばを中心とした表現の授業について述べていきたい。「国語表現」である以上、話しことばと書きことばの双方を尊重して扱ったのであるが、ともすると手薄になる話しことばについて、特に意識を喚起するようにして授業を進めた。実施したのは、筆者がHR担任もした3年C組(男子15名、女子24名、計39名)であり、このクラスは全員が上級学校への進学を希望していたクラスである。

本校の「国語表現」の授業は今年度(平成13年度)を最後に必修からはずれ、科目としては一部生徒のみの選択授業となってしまった。また、現在までも「国語表現」の授業を実施せず、今後も開講しない予定という学校が多数であるという実情がある。しかし、「話すこと・聞くこと」という分野の一層の充実が各方面から求められる中では、いつまでも読解指導偏重のままではなく、表現の指導も進めていかななくてはならない。実際には「国語総合」を初めとした科目の中で表現活動を織り込みながら進めていくことになるのだが、何をいつどう指導していくのか具体化していく必要が出てくる。

本稿では、昨年度一年間に行った「国語表現」の授業について、授業の概要・授業の組み立て方針・授業の特質・授業の評価の順に述べていき、これからの表現分野の指導の参考に供したい。

(なお、2.の②の詳細な指導については、拙稿「音声言語教育の具体的方策—アクセントを題材にした実践—」(名古屋大学教育学部附属中等学校紀要第45集<2000>所収)に述べた)

2. 年間の授業の概要

主な授業の流れは次の通りである。テキストは、本校国語科が作成した「国語表現」テキストを使用した。

- ①「国語表現」の導入
2種類のことば(音声と文字)、「話すこと」と「書くこと」、「話すこと」と「聞くこと」を中心に、言語による表現について考える。
- ②音声の基礎(その1)
語アクセントをもとに、音声の諸問題について指導。
- ③自分たちの言語生活
意識調査を実施し、それをもとに普段の言語生活を振り返る。
- ④対話と会話(その1)
1対1、または4人までの少人数で、上記③についての各自の考えを伝え合う活動をする。
- ⑤音声の基礎(その2)
強調の方法、イントネーションによる意味の違いについて、実践しながら考える。
- ⑥書き言葉の基礎
指示語、接続語、係り受け、慣用句、仮名遣い、送りがな、書き誤りやすい漢字、原稿用紙の使い方についての学習。
- ⑦日記
ある日のトピックを取り上げ、自由に文を綴り、⑥で学習したことを確認する。
- ⑧要約と感想(その1)
要約の方法を身につける。また、感想文を書いてみる。「国語表現」テキストの例文を使っての実践。
- ⑨要約と感想(その2)
現代文の授業で扱った評論を題材にし、要約文と感想文(意見文)を作成。

⑩対話と会話（その2）

4から6人の少人数で、⑨で作成した感想文をもとに各自の意見を伝え合う。

⑪音声の基礎（その3）

日本語の単音（母音・子音・特殊拍）の生成について理解し、発音・聴解の際に役立てる。

⑫敬語

敬語の仕組みの理解と実際の運用の練習。

⑬模擬面接

1対1、または、1対2での実際の面接場面を想定しての模擬面接演習。

⑭小論文

感想文・意見文の発展としての小論文の作成。

⑮スピーチ

対話・会話、話し合いの発展として、⑭の小論文を題材にして、クラスでスピーチ。

①から⑬までが前期（9月）までの活動、⑭・⑮が後期（10月以降）の活動である。（ただし、12月中旬以降は漢字・慣用句を中心とすることばの知識の涵養を目指した演習を行った。平成12年度末の時点で、高校3年生116人中112人が上級学校への進学を目指した本校においてこれはやむを得ない。）基本的に本校作成の「国語表現」テキストを用いて行ったのは、①・②・⑤・⑥・⑦・⑧・⑪・⑬・⑭・⑮であり、それ以外は筆者の用意した教材による授業である。

3. 授業の組み立ての方針

言語活動の中で最も公的な性格の強いものが、書きことばでは⑭の小論文、話しことばでは⑮のスピーチである。また、これらは難易度の最も高いものともいえる。授業の最終目標として、書きことばでは、論理性を持った説得力のある小論文が書けること、話しことばでは、不特定多数の前で筋道の通った内容を聞き手に負担を与えない音声によってスピーチできることを掲げることにした。その目標に向けて、基本から順に積み上げていくように授業を組み立てている。

まず、①で言語（ことば）というもの、表現ということを考えさせる。その上で、書きことばでは、基礎的な言語事項を集中的にまたは授業の合間に折に触れて扱い（⑥）、思いついたままに文を綴る経験をさせ（⑦）、平易な評論文を読んでまとめそれについて思ったことを書かせ（⑧）、やや長い評論文の要約と、自分の立場を定めて根拠を持った意見のある感想文を書かせる（⑨）。このように、身近で平易な事柄から積み上げていき、⑭の小論文に結びつける。

話しことばでは、音声の基礎の学習（②・⑤・⑪）や自分たちの言語生活（言うべきことは言っているか、

どういう場合に言うことを躊躇するのか、またそれはなぜか）についての考察（③）をすることから始める。そして、少人数で自分の考えを伝えたり、人の意見に対して質問をしたりするような対話の活動をさせる（④）。対話の活動の中では、自由に会話ができる時間も与える。音声の基礎の学習においても、こうなるのだというような単なる説明で済ますのではなく、4人程度のグループを組ませ、声を出して実践させたり、いろいろな意見を出すために会話させたりというような、言葉を交わすという活動を意識的にさせる。作業の内容を適確に具体的に示してやると、生徒同士で声が出しやすくなる。

人にじっくり話を聞いてもらったことのない生徒は案外多い。話を聞いてもらう経験は生徒に自信を付けさせる。どんな生徒にも、話を聞いてほしい、話がしたいという欲求、すなわち、他者とコミュニケーションを取りたいという欲求はあると考えられる。そこで、仲のよいもの同士ばかりではなく、普通のクラスメートと十分な会話や対話をさせることにまず重点を置いた授業を行った。

以上のような音声の基礎と会話・対話の学習を積んで、⑮のスピーチに繋げた。模擬面接は対話と会話（④・⑩）の発展的な作業と位置付け、同時に高校3年生の進路決定の際に必要な場合を考え、それに資することも考えた（⑬）。敬語の学習は、模擬面接の準備段階として行った（⑫）。

4. 授業の特質

筆者なりにこの授業について工夫した点を挙げてみる。

①基礎から段階を踏んだ実践

3. で述べた通りの授業の組み立てをした。公的な色彩の強い言語表現（小論文・スピーチ）を最終目標にし、私的な会話やそれを作り出す音声の諸要素から始め、目標に至るまで段階を踏んでいけるように授業を組み立てた。

ただし、音声の基礎の教授については内容がまだ不十分である。「国語表現」テキストにもトピックを載せてあるが、未熟なものである。日本語母語話者が日本語を表現する際に、あるいは聴解する際に、どのようなところでつまづくのか、それはどのような音声の要素と関係するのか、それを解決するためにどのような教材を用意すればいいのかというような一連の問題についての研究はまだ十分に進んでいない。日本語母語話者においても、音声表現を客観的に観察するためや伝わりやすい表現の工夫のため、音声の諸要素の一定の知識・技能が必要である

ということが、国語科の教員には徐々に認識されつつあると思われる。しかし、そのための教材を望む声にはまだ十分応えられる研究の状況にない。話しことばの教育においてコミュニケーションという目標が忘れられ、方法であるはずのスピーチやディベート、音読・朗読などの実践のみに終始してしまわないためにも、そのような研究が重視されなければならない。そのためには、音声の研究者と国語科教育の研究者の理解と連携・協力が必要である。

②話しことばの重視

「国語表現」という書きことばでの表現であるという発想が生徒にも教師にも固着している。本校の「国語表現」の授業は、話しことばと書きことばの比率を当初から一対一に設定して実践してきた。筆者の今回の授業でも、話しことばのウエイトを書きことばと同等かそれ以上に設定し、生徒に話しことばでのコミュニケーションというものを強く意識させることにした。

③話しことばと書きことばの教材の相互乗り入れ

従来、両者の教材は別々に用意されることが通常であった。授業も、今回は話しことば、今回は書きことばというように区別されることが普通で、本校でも、週二回の授業の片方の一単位を話しことばの授業、他方を書きことばの授業として行うことが多かった。しかし今回は、一つの題材を話しことばの教材としても、書きことばの教材としても利用することを心がけた。2. で示した③と④、⑨と⑩、⑭と⑮の活動がそれに当たる。

一つの題材を話しことばと書きことばの両方で表現することで、両者の性格の違いや特徴が体験的に理解されるだろう。また、「現代文」や「古典」、今後新設される「国語総合」という授業内において更に話しことばを扱っていくことになるのだろうが、その際にもこの観点は生きてくると思われる。

④他の授業との連携

前項③とも関連する。2. で示した⑨と⑩は「現代文」の授業で理解した教材を発展的に表現教材に取り入れたものである。「理性としての眼」(津島祐子)、「青い時間」<個性を作る実験>の章と<本との出会い>の章(羽仁進)の3つの評論について、各自好きなものを選んで要約し、感想を書いてグループ内で発表するというものである。「理性としての眼」は東京書籍版「現代文」所収。「青い時間」は筆者による投げ込み教材。筑摩書房版の旧「現代国語1」所収。3つとも5ページ程度の長さであ

る。

また、⑭と⑮は本校の設置科目である「総合人間科」(総合学習)とタイアップして実施したものである。高校三年生は「生き方を探る」というテーマのもと、自分の進路決定に資する追究を各自で行うのだが、10月以降はそのまとめとして、それぞれの考えをスピーチする慣習になっている。そこで、今年度は、スピーチの前に小論文を書かせることにし、国語科の専門の立場から小論文の書き方とスピーチの注意事項について指導した。スピーチについては、「国語表現」と「総合人間科」の両方で実施し、二度の実践の機会を与えた。

「国語総合」(4単位)では、「話すこと・聞くこと」に15時間、「書くこと」に30時間の指導が義務づけられている。「総合学習」は、もとより伝え合う力が密接に関係する授業である。そのためにも、「国語表現」の授業が、他の授業とどう関わり合うことができるのか、他の授業にどう織り込んでいけるのか、実践の中から考察するのも今回の授業の観点であった。

5. 授業の評価と課題

一年間の授業の流れとして一貫したものができ、およそ50時間の中で一応完結した。授業に取り組む生徒も概ね積極的な様子であった。グループで会話・対話、音声の基礎の実践をした際にも筆者の予想以上に声が出て、見学してくださった先生からも、普段の生活や授業の様子と違って、楽しみながらよく声を出し合う活動ぶりをみるのができたという評価をいただいた。筆者は今年度も同様の授業を担当しており、これまでの様々な勤務校でも同種の実践をしているが、声を出せるような状況設定をしてみると、案外活発に声を出すものだと実感している。

また、4. の③、④で述べたように、話しことばと書きことばを結びつけて授業を行うことや他の授業と連携することが表現の分野では可能であり、かつ有効に機能しうることが確かめられた。

課題について、二つ挙げておきたい。

一つ目は、音声の基礎の教授の問題である。この問題については、4. の④で述べた通りである。

二つ目は、授業内容に対する時間数の問題である。2単位の中で、実践や作業をしながら知識・技能の定着向上を図るのはやはり困難である。今回の授業では、学習すべきであると思われる内容を、まさに一通り扱ったというところに止まっている。高校三年生とはいえ、話しことばと書きことばの基礎から応用までを単年度の2単位で扱うことは困難であることがわかった。やはり、高校一年生から3年間(あるいは中学一

年から6年間) 系統立てて指導するようなシステムが必要であろう。このような実践を発展させ、責任を持って積み上げていく指導の形が求められる。